

はじめに

ぼくは今、ふしぎな世の中にふしぎと生きている気がしている。そのぼくにとって最大のふしぎは、かずよと出会い、結婚したことではないかと思っている。ぼくの残された時間はもう限られている。「かずよさんのことを書きなさい」と、故今西祐行さんはじめ何人かの作家たちに言われたことが、耳の底にこびりついている。

ぼくは、ぼく自身について、どれほど文章化することができるか、自信はない。まして他人であったかずよの生涯について語ることは至難のわざと思える。だが、かずよ自身が書き残したものの、かずよについて書いてくださっていたいろんな方々の言葉に拠よりながら、かずよ像に迫る努力はできそうだし、しなければならぬと思っている。

かずよの一行詩「ねぎぼうず」が、二〇〇五年度から使用されている光村図書の小学校教科書「国語五下大地」に、まど・みちおの「ケムシ」、ジャン・コクトーの「耳」、ジュール・ルナー

ルの「蝶」とともに掲載された。これはもう世界的な詩人の仲間入りをしたとみていいだろう。このことも最大級のふしぎだった。

なによりも、かずよが喜んだことだろうと、ぼくは思った。喜びのあまりかずよは逆立ちして、地球を持ち上げたような気分浸ったことだろう。事実、かずよは難病を克服しようとして、赤いタイツ姿で逆立ちをしたり、ヨガのまねごとをしていた。

かずよのことを書こうとすればするほど、ぼく自身のことをさらけ出すことになりそうだ。恥も外聞もなく、恥をさらしたところでどうということはない。つまるところは、かずよの生き方、かずよの真実にどれほど近づけるかであろう。

かずよと暮らした三十年間は、まさに至福の時代であった。もちろん、けんかもしたし、困ったこともあった。そんなこともひっくり返るめて三十年の歳月を思い出しながら、できるだけ具体的に書きやすいところから書いてみたい。

結婚以前のことは、かずよの書き残したものを中心に、近親者、師友の話に耳を傾けながら、想像力も働かせて、生き生きとした少女像になればと思っているが、おぼつかない。ともあれ、最愛の女であり、今は女神のような存在である。「がんばれ！ 平吉」と、ムチをふりふり格闘してみよう。

先にあげたジャン＝コクトーの「耳」は、「私の耳は貝の殻／海の響きをなつかしむ」という短詩だが、かずよとぼくにとつて、なつかしい詩であった。かずよがこれほどの詩人になるとは思ってもおよばない時に、この詩を共通の財産としたことも奇しき縁だったのかもしれない。勤めの出張で沖縄に旅をしたとき、大きな貝を土産にした。かずよに喜ばれたことも、今は昔の物語となった。かずよの詩をあげておこう。

貝のうた

はるばる とどいた

沖縄からの

大きな まき貝

すべすべした

手ざわりを

耳にあてれば

満ちた潮が
あたしの胸をおすの

波のひだの 一つ一つに
別れてきた さみしさ

うずまく 潮流に
さからった 愛

わすれられぬ とおい日を
ここで うたっていたのね

しおん しおん
しおん しおん

ほら

こんなにも

すずしそくに ひびくことよ